
緑色《りょくしょく》キャベツの逆襲

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑色キャベツの逆襲

【Nコード】

N5187A

【作者名】

七浦彩

【あらすじ】

風邪をひいてしまった佐緒里は妹の香代を看病のために呼び出す。

「う、いーっす。快調？」

緑色のキャベツを片手に、香代がドアを蹴り上げて入ってきた。べしんばたんという大きな音が、ぐあんぐあんと頭を内部から揺すり上げる。

「快調じゃないから呼んだんでしょうが……」

掠れた声がわたしの喉から漏れた。本日の体温、三十九度六分。咳は止まらない、頭は痛い、寒気はする、食べものの味がわからない。

完璧な風邪だ。

梅雨がいつまでたつてもあけないもんだから、傘なんていらんだろつとタカを括つてたから、数年ぶりと言われる豪雨をまともに全身で受けた。しかもその日は仕事仲間と飲んだ後だったから、べろべろに酔ってたから、アパートに帰ってくるのにいつもより時間がかかった。

そりゃあ風邪菌もこのチャンスを逃す手はないってモンでしょ。という訳で、昨日からわたしは寝込んだままとなっている。何か栄養を、とは思うのだが、動くこともままならず、料理なんて出来る状態じゃないから、風邪を悪化させるばかりだった。

なので、上京したばかりの妹の香代を呼んだ。なかなか大ざっぱな子だから一抹の不安はあったが、わざわざ田舎から母を呼び出すよりは近くの人間に、と思うのが人情ってモンだろう。仕事仲間についてしちゃ悪いし。

さっそく香代はものすごく鮮やかな色のキャベツを取り出すと、まな板に置いた。まさかとは思うけれど、あの子、もしかして。

「香代ちゃん」

「んー？ なあに佐緒里ちゃんさおじ」

「献立、なに？」

「スタミナもりもり野菜炒め」

わたしの頭の中で、油っぽく炒められたキャベツと豚肉とあと色んな具が踊った。

「……患者はおかゆを欲していますが……」

「んー、おかゆ……おナベ焦げるから後始末嫌なんだよね」

「野菜炒めでいいです」

わたしはなぜおかゆで鍋が焦げるのか、という疑問を解明するのはやめにして、香代が操る包丁の音に耳を傾けることにした。

人がいる、という安心からだろうか、心も症状も少し穏やかになった気がした。台所で悪戦苦闘しているらしい妹の背を見て、わたしはちよつと笑った。

冷却シートがだいぶ薄くなって、熱冷ましの効力が無くなってきた。わたしは新しいのを額に貼って、目を閉じた。ひやりとした感触が心地いい。

そういえば昔は逆だったよな。わたしは包丁の音を聞きながら思い出していた。

わたしはなぜか風邪一つしない元気な子供で、今まで医者に行った時といえば、遊びすぎて足の骨を折ったとか好奇心で触った草にかぶれたとか、そんな理由でだった。

姉がそんなだというのに香代は本当に体の弱い子で、すぐ咳き込んだり家族が全員ピンピンしてるなか一人だけインフルエンザをしようって帰ってきたりしていた。

熱を出して布団に寝たつきりになっている妹に、わたしは本を読んであげたり、水枕の水をかえてあげたりした。妹はそのたびに、ありがとうさおりちゃん、と言って鼻水をたらしながら笑った。

自分が眠っているあいだ、わたしが何をしていたかも知らずに。

香代は、大人になったら大ざっぱで適当な性格を発揮し始めたが、子供の頃は、そりゃあもう絵に描いたような『良い子』だった。ばたばた暴れまくるわたしを反面教師にしていたのかもしれない。そんなところはわからない。

取ってくるテストの点数は百点以外の方が少なくて、お客様にはにこにこ礼儀正しく挨拶をする。元気な割に人見知りする長女の代わりに。大人しくて本さえ与えておけば上機嫌でいる。母親の手伝いを率先してやる。欲しいおもちゃも我慢する。だだはこねない。完璧だ。理想の子供だ。

そんな妹を母親も父親も親戚も好ましく思い、可愛がるのは、ごく自然なことだと思う。けれどわたしはそれが気に食わなかった。かといって妹のように振舞えるほどわたしは器用ではなくて、わたしはますますひねくれて、その分の愛情は妹に注がれた。悪循環だった。

その上妹は体が弱かったから、両親が妹にかかりきりになるということも多かった。たかが風邪一つで両親の関心と愛情とを独り占めにできる妹が、うらやましくて、妬ましくて。

わたしは、妹が安心してきつて寝ている間に、何度もその真つ赤になった頬をつねった。頬だけじゃない。汗ばんだ腕や足も。わたしは妹の体に赤い跡がついていくのを、満足しながら眺めていた。しかもつねり方にも工夫をこらし、母が妹の汗を拭ってやるときや着替えをさせてやるころにはその跡が消えるくらいの力でつねっていた。

最低な姉だと思う。

あの頃のことを思うと、自己嫌悪で吐きそうになる。

幼かった。そんな形でしかうつぶんを晴らすことを知らなかった。何も知らない妹が懐いてくるのに、震えるほどの優越感を味わった。ひどく醜い感情だった。

だからこそ今、こうして妹と仲良くできることが、嬉しくもあり、また辛くもある。複雑な気持ちだった。

「うーあーい。お待たせ」

ふわりとしよっぱい匂いがして、キャベツ九対他の具材一という摩訶不思議な野菜炒めが運ばれてきた。わたしはその緑々《みどりみどり》した謎の料理を凝視した。

「香代ちゃん。これ野菜炒めじゃない。キャベツ炒め」

「佐緒里ちゃん、キャベツはれっきとした野菜だよ？ キャベツを差別しちゃいけないよ。あ、今ちよつと韻踏んだ。ぶふっ」

自分で自分の言葉にウケている香代を無視して、わたしはてらてら光るキャベツを口に運んだ。しょっぱい。スタミナがつくどころか残りの力も奪われそうな気がする。

「あーこれしょっぱいねー。でも風邪引きには水いっぱい飲ませろって言うしちようどいいか」

香代はご無体なことを口走り始めた。わたしは関節がみしみし痛むのを我慢して、自分で台所にスポーツドリンクを取りに行った。そうしたらそこはゲーデニング王選手権が行われたのだと思うほど、緑色になっていた。散乱したキャベツその他の切れ端で。

頭痛が増した。

「……香代ちゃん」

「ああ、その後で掃除するから。佐緒里ちゃんちってまな板もフライパンもちちゃくて料理しづらいんだもん」

コンロ周辺にもキャベツが散乱している。流しには焦げたキャベツがへばりついたフライパンが放置されていた。

わたしは後悔の念に苛まれながら、ペットボトルのスポーツドリンクを一気に飲み干した。そして新しい大きな方のペットボトルを取り出し、氷を入れたコップを二つ、一緒に運んだ。

「あ、ありがと。しかしこれやばいね。海の水飲み干したらこんな感じかな」

「そんなの病人に食べさせないでよ」

「それもそうだ。手伝うよ」

わたしたちは苦しみつつもしょっぱいキャベツその他炒めを少しずつ減らしていった。おかずが減るよりスポーツドリンクが減る方が早かった。

「そついやさあ、佐緒里ちゃんいつつもあたしの看病してくれたよね」

出し抜けに香代がそんなことを口走った。わたしは少しどきりとしたが、平静を装った。

「ああ、うん。そんなこともあったね」

「もー苦しくてさー。熱ひどいし頭ガンガンだしさー、食べるものっていえば味気ないおかゆでさー。その上部屋にテレビなかったから楽しみつつたら本しかなくてさ。つまんなかった。親はべたべたひつついて監視されてるみたいだったし。あたしずつと佐緒里ちゃんがうらやましかったな」

わたしは思いもよらなかった香代の言葉に、勢い余ってキャベツを気管の方に押しやってしまった。むせるわたしを咳で苦しめると思ったか、香代は優しく背中を撫でてくれた。

「……そうだったの？」

「うん。あーあとさ、佐緒里ちゃん親戚来るといつつも逃げてたでしょ。だからあたしは逃げらんなくてさ、もーうるさいババアの相手さいつあく！ その上母さんも父さんもあたしにヘンな期待かけてくるからさー。なんかプレッシャーでさ。いい子じゃなきゃいい子じゃなきゃって思っで。……反抗期に反抗するの我慢する青春時代ってどうよ」

香代はどん、とコップを置いて笑った。その拍子に、上京してから開けたというピアスホールにつけられた新しいピアスが、揺れた。「という訳で、ちょっぴり仕返し」

わたしはなにがなんだかわからなくなっで、放心したまま、とりあえず苦笑した。

「キャベツで？」

「キャベツで」

わたしたちは顔を見合わせて笑いあった。お互い持ってた、無いものねだりのコンプレックス。

「でも佐緒里ちゃんがいてくれたから、あたしどうにか暴れ出さずに済んだんだよ」

「それはよかった」

ようやく空になったお皿を横目に、わたしは薬を飲んだ。充分唇を湿らせて、あのね、とずっと心の中に溜めていたものを香代に話した。ただし、つねったことは内緒にして。それはわたしの心の中に、ずっとしまっておく。この痛みは、このわたしだけの痛みは、生涯わたしが背負っていくべきものだから。香代に取った醜い感情のはけ口の罰として。

だから、わたしは黙っておくことにした。
何よりも、香代を無くしたくないから。

ずるいと思う。けれど、きつと黙っていた方がお互いのためだろう。香代だって黙ってることはまだいっぱいあると思う。わたしのせいで我慢したことは、まだたくさんあると思う。でも香代はわたしに懐いてくれている。わたしも香代のが好きだ。それでいいんだ。姉妹ってのは、そんな感じでいいんだ。

熱を計ったら少し下がっていた。

散乱したキャベツを片付ける香代の背中に、窓からこぼ零れた太陽の日差しが当たっていた。

ああ、もうすぐ、夏が来るな。

わたしは安らかな気持ちで、目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5187a/>

緑色《りよくしょく》キャベツの逆襲

2010年10月8日15時52分発行